

# 放射能を克服する村へ

—飯館村菅野村長の言説にみる村のイメージの転換—

吉村 未優

## はじめに

—皆さんは今、「福島」と聞くとどのような「イメージ」を抱くだろうか？

福島県相馬郡飯館村は、自然に囲まれた人口約 6000 人の小さな村である。小さな村ながら、村をあげて村づくりに力を入れており、飯館の産業に目を向けた地産地消のスローライフ・「までいライフ」という独自のプランを実践してきた。2005 年に過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務大臣賞）を受賞、2010 年に「日本で最も美しい村」連合加盟、などといった数々の成果を上げている。

そんな飯館村に、2011 年 3 月、原発からの放射能<sup>1)</sup>が降った。

飯館村は、村の大部分が福島第一原発から 30 キロメートル以上離れた場所に位置する。浪江町、双葉町といった原発から 20 キロメートル圏内の「警戒区域」はおろか、「30 キロメートル」の線引きからも対象外で、当初は国から「飯館村は、放射能による避難の必要性はない」とされていた。ところが一転、飯館村全域が「計画的避難区域」となった（右図）。政府から、学者から、「飯館村は、放射能汚染の心配はありません、安全です」と言われ続けた村民にしてみれば、まさに「想定外」のことであろう。こうして、原発から 30 キロメートル離れている飯館村は、事故後すぐに避難を行った「30 キロ圏内」の住民よりも、数カ月分余計に被曝させられる、という特殊な事態となった。

「自分のふるさどが、放射能に汚染された」—この非常事態において、そして被害がどれだけ深刻なのかすらわからない状態において、「飯館村



「アサヒ・コム」2011. 5. 15 より  
<http://www.asahi.com/special/10005/TKY201105140406.html>

の住人」は、「飯館村」は、どのように考え、行動したのか。人々にとって「自分のふるさと＝飯館村」とはどのようなものであるのか。原発事故発生からおよそ半年～一年後の言説を見ていくことで、原発事故発生後の飯館村における「村づくり」、そして「村のイメージ」とは何か、について考えていきたい。

## 飯館村避難に関する長谷川・菅野の意見

飯館村の酪農家であり、また飯館村前田地区区長である長谷川健一<sup>2)</sup>は、原発事故後、「放射能の被害を最小限に抑えなければ」と、一刻も早く村民を避難させるべき、という立場に立った。

国から村に派遣された学者が「飯館村には放射能の被害はない」「安心しろ」と発表する一方、京大の今中哲司氏らは「こんな線量の高いところに人が住んでるなんて、信じられない」<sup>3)</sup>と述べる。このように情報が錯綜する中で長谷川は、国の言うことを鵜呑みにしてはいけない、自分が動かなければ、と考えるようになる。「繰り返し『安全だ』『大丈夫だ』と言われていくうちに、『危険だ』『避難すべきだ』という当たり前の声が次第に上げづらくなっていくから恐ろしい」（長谷川 p64）という発言からもわかるとおり、長谷川は一貫して、人々を放射線から守るためには一刻も早く「避難」するのが「当たり前だ」という姿勢をとる。

このように情報公開や早期の避難を主張する長谷川に対し、「放射能の線量を村や全国に公表するな」と正しい情報はシャットアウトし、「拙速な避難をすべきではない」と国からの避難指示に反発する姿勢を示し続けたのが、飯館村長である菅野典雄だ。彼は何を思い、放射能の被害を隠し、放射能被害の大きな飯館村から、人々を避難させなかったのだろうか。

菅野は、自著『美しい村に放射能が降った』<sup>4)</sup>において、「『全村避難』ではなく『コミュニティの崩壊を防ぐために、ある程度、村民を残しながら対応したい』」（菅野 p170）と述べているように、村を離れ「避難」することで、「飯館村」という「コミュニティ」が消失してしまうことを恐れたのである。

さらに、国から飯館村に「計画的避難指示」が出されたことを受け、同著で、避難命令は「放射線から健康を守ることが重視され、避難によって生活の安心を崩すリスクが考慮されていない」（菅野 p151）、『放射能の害よりも、避難の害のほうが大きい場合』だって、ある」（菅野 p190）と、「放射能の被害を防ぐこと」よりも「村の存続」を重視していることをはっきりと述べている。

このような菅野の姿勢に対し、前田区長の長谷川は、飯舘村よりも原発に近い「南相馬市の二万人はすぐ避難したことで余計な被曝をせずに済んだのです。一方の飯舘村民はすぐ避難しなかったために被曝し続けたのでした」（長谷川 p168）と、痛烈に非難した。

では、菅野が守ろうとする「飯舘村」とはどのようなものであったのか。菅野は「飯舘村」でどのように生きてきたのか。次節では、「原発事故が起こる以前」の「飯舘村」での菅野の取り組みについてみていく。

## 飯舘村の「までいライフ」—自主・自立の村づくり

飯舘村の地域の方言には、「までい」という言葉がある。「丁寧に」や「心をこめて」など、いろいろな意味を含み様々な場面で使われる言葉である。

飯舘村では村長の菅野のもと、この言葉に着目して「までいライフ」という村づくりプランが実施されてきた。これはもともと、大量生産・大量消費・大量廃棄の暮らし方を見直す「スローライフ」を村民にわかりやすくするために名前を変えてスタートした計画で、「村の中のさまざまな資源に目を向け、それを積極的に生かしていく」暮らし方である。こうした村づくりが評価され、飯舘村は2010年、「日本で最も美しい村」連合からの推薦を受け加盟する、といった成果を上げている。（菅野 pp. 125-126、長谷川 pp. 183-185）

また、「までいライフプラン」が立ち上がった当時、飯舘村は現在の南相馬市と合併する話が出ていた。菅野は、合併はたしかに村に利益をもたらすが、長期的にみて「合併して大きくなった自治体では、村民に本当の『までいライフ』を送ってもらうことが難しくなる」（菅野 p117）として、飯舘村は合併協議会から離脱し、村民自らの考えで村づくりをする決断をした。ここでも、「飯舘村」を失いたくないという菅野の姿勢が見える。

「村の中のさまざまな資源に目を向け、それを積極的に生かしていく」—そのために、村の木材をふんだんに使った施設の建設や、村づくりを支える若妻の海外旅行企画など、菅野はユニークな取り組みを次々と行い、評価されてきた（長谷川 p135）。しかし原発事故により、飯舘村は「村の中のさまざまな資源」を失い、このような地産地消の「までいライフ」を続けることが困難となった。

他地域からも評価される「までいライフ」は、いわば飯舘村のアイデンティティである。このアイデンティティが失われること、それはすなわち村の「イメージ」の消失である。菅野が築き上げてきた「飯舘村のイメージ」が消失の危機にある今、菅野は何を思い、どのような対策をとるのか。

次節では、「原発以後の飯舘村」に関する菅野の言説をみていく。

## 「飯舘村」イメージの再建

菅野にとって、「避難させて放射能から飯舘村民を守る」ことよりも「守りたい」ものとは、何であるのか。

飯舘村村長・菅野と前田区長・長谷川は、飯舘村避難について主張が対立しているが、それに関連して「放射線に関する情報の公開」についても意見が衝突する。前々節でみてきたように、「現実を知らず誤った安心を与えられ被曝し続ける怖さ」から、長谷川は放射線について正しい情報を公開しない国や政府に対して憤りを示した。一方菅野は、実際の放射線量を村民や国民から必死に隠そうとしていたのである。菅野は、現実を伝えることで「福島＝被曝」あるいは「飯舘村＝被曝」のイメージになることを一番怖れていたのだろう。これは、菅野が「単に『(放射能の) 数値が高い』ことのみを強調・報道され、これまでの村の活動とは全く逆の立場で『世界の飯舘村』になってしまった」「この風評被害が将来に渡って甚大なものとなることは、本村が最も憂慮する事態」（菅野 p30、カッコ内は引用者）とマスメディアを批判していることから明らかである。

菅野は、被害の大きさもよくわからない「放射能」にさらされることよりも、村の危険を認めて全村避難し、飯舘村が「放射能の村」になることで、飯舘村がこれから「立ち直れない村」になってしまうのを怖れているのである。

菅野は原発事故を受け、飯舘村を「放射能汚染のモデルケース」とするプランを掲げている。

飯舘村が、原子力事故における放射能汚染被災地の範となって復旧・復興を果たすことこそが、福島県を初めとする東北地方、さらには日本にとっての最大の利益となり、もって世界の範となる（菅野 p32）

飯舘村を（放射能汚染の）モデル地区に指定してほしいと話した。だが、（中略）官房長官は『健康を守ることが第一だ』と繰り返すだけだった。（菅野 p36、カッコ内は引用者）

放射能で飯舘村の土壌が汚染された今、「までいライフ」の根幹である地産地消—飯舘村で作り、飯舘村で活用する—はほぼ不可能な状態となってしまった。「までいライフ」という「プラスイメージ」を失った飯舘村に残されたのは、「放射能汚染」という「マイナスイメージ」のみであった。自らが村政を行い、共に生きてきた飯舘村が「マイナスイメージの村」

となることは、菅野にとって何よりも耐えがたいことだったのだ。

つまり菅野は、「飯舘村＝放射能に汚染された村」という「マイナスイメージ」ではなく、「飯舘村＝放射能汚染から蘇った村」という「プラスイメージ」を作りだそうとしているのである。

## おわりに

本稿では、「村づくり」に尽力してきた村が「村の存亡の危機」という境地に立たされる、という特殊な事例から、村の「イメージ」についてみてきた。

「原発」という「マイナスイメージ」を、そこから復興することによってむしろ「プラスイメージ」にする—これに非常に似た例が、「原爆」から立ち直った「平和」のまち「広島」や、「震災」で人々に支えられた「ボランティア」のまち「神戸」である。1995年の阪神淡路大震災から数年は、神戸といえば「震災のまち」であった。原爆にいたっては投下から数十年、「ヒロシマ」の風評被害に苦しめられたと聞く。しかし彼らは、それを克服することで、マイナスイメージをプラスに読み替えさせていったのだ。

同様の試みが、福島第一原発観光化プロジェクト<sup>5)</sup>などとして始まってもいる。さらに、福島に文化を、と発足した「プロジェクト FUKUSHIMA!」の中心メンバーである大友良英は、「広島は『No More Hiroshima』と言われるけれど、それが不名誉な響きではない感じ」「平和運動の象徴として、広島の人たちは誇りを取り戻したような気がしている。だったら、福島という名前を、ポジティブな名前に転換していけばいいんじゃないか」<sup>6)</sup>と、「広島」のイメージ転換に「福島」を重ねて語っている。

まちの「イメージ」は、変化するものだ。その「イメージ」は、まちのあり方に深く関わる。今回取り上げた飯舘村の例は、「震災」による「原発事故」によって、「イメージを転換させられた直後」にあたる。今後、菅野や様々な村民たちの取り組みによって「飯舘村のイメージ」はどう変化していくのか。どのように新たな「村づくり」が行われるのか。これからも「村のイメージ」と「村」の関わりを追うことができると思う。

## 注

1) 本論文では、正確には「放射性物質」というべきところも、一般に使われている用法から「放射能」とした。

- 2) 以下、長谷川の発言の引用は、長谷川健一『原発に「ふるさと」を奪われて―福島県飯舘村・酪農家の叫び』2012 宝島社から。以下同書からの引用は（長谷川 p\*\*）と本文中に略記する。
- 3) 和合亮一『ふるさとをあきらめない―フクシマ、25人の証言』2012 新潮社 p24
- 4) 菅野典雄『美しい村に放射能が降った―飯舘村長・決断と覚悟の120日』2011 ワニブックス。以下菅野の発言は同書より。同書からの引用は（菅野 p\*\*）と本文中に略記する。
- 5) 「福島第一原発観光地化計画」<http://fukuichikankoproject.jp/>
- 6) 磯部涼編著『プロジェクト FUKUSHIMA! 2011/3.11-8.15 いま文化に何ができるか』2011, K&B パブリッシャーズ p41

本稿では、「福島」「飯舘村」は「広島」や「神戸」を目指していると述べたが、福島原発事故は、原爆や地震といった「外部からの不可抗力による被害」ではなく、むしろ水俣病などの公害と同じ、つまり内部で起こった「人災」に分類するのがふさわしい。みなさんは、「人災」である「水俣」や「四日市」に対してどのような「イメージ」を抱くだろうか―やはり、「福島」「飯舘村」のプラスイメージへの転換は、かなり難しいのだろうか。

しかし、「福島」というと、震災・津波・原発という三重苦の中強く耐え忍んでいる、という「良いイメージ」が国民一般に浸透している（がんばれ東北！、Steady Japan など）。「福島」「飯舘村」は、これまでマイナスイメージから脱却したことのなかった「人災」からの「プラスイメージ」への転換という、初の例がみられることになるのかもしれない。

吉村未優

